

Toward a Model for the Alternation of Grammatical Categories (4)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 丘 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6097

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



文法範疇交替モデルの構築に向けて（4）

村 上 丘

0. はじめに

英語における文法範疇の規定は、長年にわたり、文法学者の重要課題であった。名詞と動詞の定立に関しては、大方の賛同を得られてはいるものの、その他の文法範疇については、百家争鳴の状況である。それは、文法範疇間の境界線が未確定であるという事実が端的に表している。たとえば、形容詞と副詞、前置詞と副詞、前置詞と接続詞などの境界線は、確定されていない。

このような問題は、何に起因するのであろうか。それは、文法範疇に対する根本的な見方に関わると思われる。すなわち、従来は、「文法範疇とは一元的な現象である」という暗黙の前提があったと思われる。すなわち、「文法範疇は成員の所属条件さえ厳密になれば、個々の語はいずれかの範疇への所属が決まる」という前提があったと思われる。そして、この前提に立脚する限り、文法範疇間の境界線の画定という不毛な議論に陥ると思われる。

統語範疇には、内容語（content word）と機能語（function word）という区分がある。この区別は、意味的情報の差・音節構造の複雑さ・成員の多少など、実際的で、英語教育など、様々な領域で使用されてきた。しかし、この区分は、実用性のみに着目され、言語体系の中での位置づけは、理論的に追及されてこなかったと思われる。

本稿では、「文法範疇は2元的な現象である」とであると想定する。すなわち、文法範疇には、中核詞（nucleus）と調節詞（regulator）の2種類があると主張する。中核詞は、おおよそ内容語に相当する。従来の文法範疇と同様、個々の語がどの範疇に属するのかが規定でき、多数の語がこれに当たる。一方、調節詞は、おおよそ機能語に相当する。中核詞同士を関係づける少数の要素群で、媒介的機能を持つ。調節詞は、特定の中核詞に所属する語を、他の中核詞へ変更する橋渡しの役目を果たす。

中核詞に所属する成員は、開かれている。すなわち、中核詞は、その成員の数が多くだけでなく、新しい成員を受け入れる用意ができています。その成

員は、2種類ある。1つのタイプは、新造語である。時代の変化によって生じた新しい語は、名詞・動詞・修飾詞として導入される。もう一つのタイプは、他の文法範疇からの変換による。すなわち、中核詞は、もともと、その範疇に属していたものと、他の中核詞からの変換によるものとが存在する。

中核詞は、動詞・名詞・修飾詞の3つから成立する。これらは、調節詞によって、互いに他の文法範疇に変換可能である。つまり、動詞・名詞・修飾詞は、三つ巴の関係にある。しかし、これらは、同等の関係にあるわけではない。この中で、もっとも依存的なもの、つまり、自律性の低い中核詞は、修飾詞である。なぜなら、修飾詞は、動詞あるいは名詞のいずれかを修飾する機能を有するからである。つまり、修飾詞は、動詞あるいは名詞の存在を前提している。一方、名詞と動詞は、非依存的なもの、つまり、自律性の高い要素である。なぜなら、他の要素がなくとも、存立可能であるからである。

一方、調節詞は、閉じられており、その成員は、限定されている。ただし、調節詞と機能語には、大きな相違がある。調節詞は、単一言語レベルだけでなく、語・句・文というように、異なる言語レベルにおいて作用する。例えば、形態の領域における調節詞は、品詞交替を惹起する。また、統語の領域における調節詞は、補文化する機能を持つ。また、be や have などの操作詞も、調節詞に属する。したがって、調節詞は、従来の機能語より、はるかに射程が広い。

言語レベルのいたるところに、ゼロ形式が具現する。語のレベルでは、転換 (conversion) という現象がある。cook という名詞は、ゼロ接辞を付加することにより、動詞になる。句のレベルにおいても、直示動詞の後では、home の前の前置詞がゼロ化される。文のレベルでは、補文標識は、ゼロとして具現する場合がある。虚辞記号 (it, there) も、しばしば、ゼロとして具現する。ゼロ形式は、本稿では、調節詞に属する。このことにより、異なる言語レベルにみられる同一現象を、統一的に把握することができる。

本稿のタイトルに、＜交替 (alternation)＞という用語が使われている。この用語は、本稿では、＜相互変更 (reciprocal change)＞という意味で使用する。＜変更＞とは、変更前の局面・変更後の局面・変更を促す形式、という3つの相から構成される。本稿では、文法範疇を規定するには、これら3つの相を区別することが重要であると主張する。すなわち、変更前後の形式は、中核詞に属し、変更を促す形式は、調節詞に属する。

ある局面が他の局面に＜変更＞するのは、言語の動的現象である。一方、＜変更＞の前後の局面は、言語の静的状態である。＜変更＞は、言語の動的現象と静的状態の両方に関与する。文法範疇を規定するには、これら両方の局面を考慮する必要がある。文法範疇は、固定的な概念ではなく、流動的な概念である。その流動性は、無秩序なものではなく、体系的なものである。本稿の目的は、文法範疇の＜変更＞という現象を手掛かりに、英語の文法範疇の全体像に迫ることである。

7. 調節詞の特徴

＜調節詞＞の本務は、同一の言語レベル、あるいは異なる言語レベル間の言語要素を関係づけることである。この文法範疇は、既存の文法範疇とは異なる様々な特徴を持っている。

第一。その適用は、一回とは限らない。語のレベルにおいても、句のレベルにおいても、同一の言語要素に、二つ（以上）の＜調節詞＞が関与する場合がある。語のレベルにおける事例を観察しよう。＜調節詞＞-able は、動詞 predict を、predictable という修飾詞に転換する。さらに、＜調節詞＞-ity は、その修飾詞を名詞 predictability に転換する。同様のことは、controllability にもあてはまる。ここで、X を言語要素、C を＜調節詞＞とすると、次のように表示する事ができる。いずれも、言語レベルは一定なので、＜水平的変更＞である。

(89) $X > X + R_1 > X + R_1 + R_2$

(90) a. predict > predictable > predictability

b. control > controllable > controllability

次に、句のレベルにおける事例を観察しよう。＜調節詞＞-ed は、動詞 accuse を修飾詞 accused に転換する。＜調節詞＞the は、その修飾詞を名詞 the accused に変換する。これも、＜水平的変更＞である。同様のことは、the blessed にも当てはまる。

(91) a. accuse > accused > the accused

b. bless > blessed > the blessed

上記の事例は、文法範疇が、2つの＜調節詞＞の介在によって連続的（A > B > C）に変化する事例である。次の事例は、2つの＜調節詞＞によって、文法範疇が回帰的（A > B > A）に変化する＜水平的変更＞の事例であ

る。＜調節詞＞である不定冠詞 a は、動詞句を名詞句に変換する。さらに、＜調節詞＞である軽動詞 have は、その名詞句を再び動詞句に復帰させる。try/look/sit down が、その例である。

(92) a. try > a try > have a try

b. look at this > a look at this > have a look at this

c. sit down > a sit-down > have a sit-down

第二。前節において、＜調節詞＞は、他の＜調節詞＞と交替することにより及した。これは、換言すれば、＜調節詞＞とは変異形を持つということである。たとえば、ある特定の名詞は、2つ以上の軽動詞を取ることができる。これは、軽動詞が語彙的動詞 (lexical verb) より、機能的動詞 (functional verb) としての性格を持っているからである。機能的ということは、＜調節詞＞として認定できることを意味する。X を、行為名詞、Rm と Rn を、同一の調節詞の変異形とすると、次のように表示することができる。

(93) Rm + X ~ Rn + X

(94) a. have a look/nap/rest

b. take a look/nap/rest

＜調節詞＞は、零形式のタイプも存在する。

＜表 7-1＞

言語 レベル	言語現象	例
語	転換	(i) She biked to school
句	前置詞削除	(ii) He went home yesterday.
句	不定詞削除	(iii) They made me sign the agreement.
文	補文標識削除	(iv) I wish you would stop smoking.
文	前置詞省略	(v) He was reading, (with) a pipe in his mouth.
文	前置詞省略	(vi) (On) hearing the news, she turned pale.

(i) においては、接辞を付加することなく、名詞が動詞に転換している。この場合の＜調節詞＞は、ゼロの接尾辞形式であると考えることができる。(ii) においては、直示動詞 go の後の環境で、場所を表す前置詞が home の前で、表面に現れていない。この場合の＜調節詞＞も、ゼロの前置詞形式であると

考えることができる。(iii)において、不定詞を表示する *to* が具現化していない。これは、上位の使役動詞によって統御されている。この例も、ゼロの不定詞形式と考えることができる。(iv) は、補文を示す *that* が、祈願文において、表面に現れない事例である。これは、ゼロの補文標識と考えることができる。(v) は、前置詞 *with* が、付帯状況を表し、後ろに非時制節に従える場合、省略可能なことを示す例である。(vi) は、前置詞 *on* が、瞬間を表し、後ろに *-ing* 形式の非時制節に従える場合、省略可能なことを示す例である。

これまでの考察をまとめると、＜調節詞＞は、つぎのような特徴を持つ。

(95) ＜調節詞＞ (regulator)

- a. 文法範疇の出力を一定に保つ。
- b. 異なる言語レベルに適用する。
- c. 異なるタイプの言語要素から構成される。
- d. 意味的に希薄である。
- e. 生起する環境が、多様である。
- f. 交替する場合がある。(変異形を持つ。)
- g. 繰り返し適用可能である。
- h. 義務的あるいは随意的に、省略される場合がある。

8. 調節詞の分類

＜調節詞＞は、実質的な意味を担わず、もっぱら、当該の言語要素の文法範疇を調整する事に与る。＜調節詞＞の入力ならびに出力は、名詞・動詞・修飾詞に限定される。それ以外の範疇を入力並びに出力にする操作は、観察されない。この節では、＜調節詞＞を、様々な観点から特徴づけることを目指す。

次の資料を観察しよう。

- (91) a. encase, enchain
b. enrich, enlarge.

語のレベルで、名詞を動詞に変える＜調節詞＞には、接尾辞 *-ify*, *-ize* がある。しかし、*case*, *chain* という名詞は、これらの＜調節詞＞と共起しない。これらの名詞は、接頭辞 *-en* と共起する。

通例、「認可 (license)」は、動詞が補部を規定する場合に使われる。本稿

では、それを拡張し、調節詞とそれが従える要素との関係に使う。

(92) もし調節詞 A が、特定の言語要素 B と共起するなら、A は B を認可する。

この概念を導入すると、＜調節詞＞ en- は、名詞 case, chain を認可することになる。同様のことは、形容詞を動詞に変える＜調節詞＞ en- についてもあてはまる。＜調節詞＞ en- は、接頭辞であり、出力の左側に付加する要素である。

一方、共起する言語要素を特定できない＜調節詞＞も存在する。その代表例は、be である。この＜調節詞＞は、後続する言語要素を特定化することができない。すなわち、共起する言語要素を認可することができない。この場合、be と共起可能な文法範疇（名詞句あるいは修飾句）を規定すればよい。

次の資料を観察しよう。

(93) a. He looks like an able man.

b. It looks like he is an able man.

＜調節詞＞ like は、句と文の両方のレベルで観察される。この＜調節詞＞は、修飾句の文法範疇との共起を規定する。さらに、この＜調節詞＞は、出力の左側に付与される要素である。しかし、それだけでは、記述は完結しない。なぜなら、like は、極めて限られた動詞としか共起しない。調節詞 like は、知覚動詞 (look, sound, feel, taste, smell) あるいは連結動詞 (seem) を認可する。

＜調節詞＞を分類するには、次の観点を設定することができる。

(94) a. どの言語レベルにおいて適用できるか。

b. 入力と出力の文法範疇は何か。

c. 言語要素を認可 (license) するか。

d. 生起する位置はどこか。

上記の観点から、＜調節詞＞を整理すると、次の表を作ることができる。

<表 8-1>

調節詞	入力	出力	認可	出力位置
-ment, -tion	動詞	名詞	有	右
-able, -ible	動詞	修飾詞	有	右
en-	名詞・修飾詞	動詞	有	左
be	名詞句・修飾句	動詞句	無	左
with, in, on	名詞・節	修飾句・修飾節	有	左
the	修飾句	名詞句	有	左
like	名詞句・文	修飾句・修飾節	有	左
-ed	名詞句・文	修飾節	無	右
have	名詞句	動詞句	無	左
it	修飾句・動詞句	文	有	左
there	名詞句・動詞句	文	有	左

次に、<調節詞>を、入力と出力の文法範疇をもとに分類すると、以下の表が得られる。なお、網掛けの要素は、<再利用>可能な要素である。

<表 8-2>

出力 \ 入力	名詞	修飾詞	動詞	文
名詞		-ness, -(i)ty the	-ment, -tion, -er, -ance a	that, if, whether, -ing, to
修飾詞	-al, -y, -ic, -ful, -ly, -able, -ate, <u>ed</u> , <u>like</u> , <u>with</u> , in, on		<u>-able</u> , <u>-ible</u> , <u>-ive</u> , <u>-ing</u> , <u>to</u>	<u>like</u> , <u>with</u> , <u>ing</u> , <u>ed</u> , <u>to</u>
動詞	<u>-ize</u> , <u>-ify</u> , <u>-en</u>	<u>-ize</u> , <u>-ify</u> , <u>-en</u>		
文	<u>be</u> , have	<u>be</u>	it, there	

この表は、語・句・節などの言語レベルの相違を考慮に入れていない。ここから、次のことを摘出する事ができる。

(91) a. 名詞出力調節詞は、再利用されない。

b. 動詞出力調節詞と修飾詞出力調節詞は、頻繁に再利用される。

9. 再利用の特徴

この章では、＜再利用＞という概念の精密化を図る。＜再利用＞は、同一の言語要素の反復の使用である。このような操作は、一件、言語に曖昧性を導くように思われる。しかし、このメカニズムは、言語に過度の複雑さを持ち込まない、という利点がある。すなわち、同一の言語要素が重複して使用されようと、その機能が対立的であるなら、（すなわち、誤解を生じないのなら）問題はない。むしろ、＜再利用＞は、語彙項目の数を制限する利点がある。これは、言語が、限定された数の音韻を利用するのと軌を一にする。

これまで観察した＜調節詞＞を、語のレベルと句のレベルに分けて考えてみよう。それぞれが、どのような範疇の変更を引き起こすかは、次のようにまとめることができる。このうち、網掛けの要素は、＜再利用＞の対象である。

＜表 9-1＞

範疇の変更	語のレベルの調節詞	句のレベルの調節詞
動詞＞名詞	-ment, -tion, -er	the, a
名詞＞動詞	ify, ize, -en	be, have
名詞＞修飾詞	-able -al, -y, -ic,	with, in, on, -ed, like
修飾詞＞名詞	-ty, -ness	the
修飾詞＞動詞	ify, ize, -en	be
動詞＞修飾詞	-able	-ed, -ing

これを観察すると、調節詞は、出力が予測可能なように再利用されていることが分かる。たとえば、-ify, -ize, -en の入力、名詞・修飾詞の2種類がある。しかし、その出力は、すべて動詞である。-able の入力、名詞と動詞の2種類がある。しかし、出力は、修飾詞である。

さらに、文のレベルについて観察しよう。文は、時制節と非時制節に分けることができる。それぞれにおいて、次のような＜調節詞＞が観察される。網掛けの部分は＜再利用＞、－は、具体例が観察されないことを示す。

<表 9-2 >

範疇の変更	時制節の調節詞	非時制節の調節詞
文>名詞	that, if, whether	-ing, to 不定詞,
文>修飾詞	like,	with, in/on...ing, -ing, -ed
文>動詞	—	—
名詞>文	イントネーション	—
修飾詞>文	イントネーション	—
動詞>文	イントネーション	—

ここから、次のことを導くことができる。

- (92) a. 句のレベルにおける<調節詞>は、すべて、<再利用>される要素である。
- b. 文のレベルにおける<修飾詞>を形成する<調節詞>は、すべて、句のレベルにおける<調節詞>の<再利用>の要素である。
- c. 文のレベルにおいて、<動詞>を形成する<調節詞>は、存在しない。(もしあると、既存の<動詞>と重複するからである。)
- d. 文のレベルにおいて、名詞・修飾詞・動詞を文に変換する<調節詞>は、イントネーションである。

<再利用>は、次の二つのタイプがある。

- (93) a. <レベル内再利用> (sublevel reuse) : ある<調節詞>が、語同士、句同士など、同一言語レベルにおいて<再利用>される。
- b. <レベル間再利用> (inter-level reuse) : ある<調節詞>が、語と句など、異なる言語レベルにおいて<再利用>される
- この用語に基づくと、<再利用>の現象は、以下の表のように集約される。

<表 9-3 >

調節詞	入力	出力	言語レベル
a, the	動詞・修飾詞	名詞	レベル間
-ing, -en	文	修飾詞	レベル間
with, on, in, like	名詞・文	修飾詞	レベル間
-able	名詞・動詞	修飾詞	レベル内
-ify, -ize	名詞・修飾詞	動詞	レベル内
be, have	名詞・修飾詞	動詞	レベル内
that, whether, if	文	名詞	レベル間

従来、be は、＜操作詞＞あるいは＜連結詞＞として位置付けられてきた。このような名称は、苦渋の選択である。すなわち、一般動詞なのか、あるいは、一般動詞とは独立した範疇なのかが、等閑に付されている。同様に、like は、これまで接続詞および前置詞等の語類に入っていた。これでは、同音異義語なのか、多義語なのかが、解決されない。

従来、言語要素には、どの文法範疇に所属するのかが不明なものが存在した。本稿では、＜調節詞＞と＜中核詞＞いう2区分を提唱することにより、所属不明の言語要素を、一律に＜調節詞＞として処理することができると主張する。これは、単に、従来所属不明の語を「屑入れ」(waste basket)に入れることを意味しない。＜調節詞＞は、＜中核詞＞の担わない共通の役割がある。それは、ある＜中核詞＞に属する語を、他の＜中核詞＞に変換することである。

参考文献

- 村上丘. 2012. 「文法範疇交替モデルの構築に向けて (1)」『大妻レビュー』第 45 号.
 村上丘. 2013. 「文法範疇交替モデルの構築に向けて (2)」『大妻レビュー』第 46 号.
 村上丘. 2014. 「文法範疇交替モデルの構築に向けて (3)」『大妻レビュー』第 47 号.